

関西地域のオペラ活動2012

白石裕史

2012年の関西音楽界は、いま時代の節目とも新しい胎動とも取れる分岐点に立っている、という手応えがあった。それは大阪の音楽の殿堂である二つのホールの動向が、漸く鮮明になったことに基づいている。

その一つ、名ホールと謳われたザ・シンフォニーホールは開館30周年。通常なら記念事業に包まれるところだが、所有者の朝日放送が学校を経営する滋慶学園グループに売却することを発表したため、祝祭気分はお預けになった形だ。その後の経過は模索的、流動的であり、ただ朝日放送が2013年末まで従来の形態で運営を続けることだけが決まっており、注目を浴びている。

もう一つは豪壮なフェスティバルホール。1958年誕生だから、この年まで54年を経過したことになる。大阪市の中之島再開発事業に伴う改築により2008年に休館し、2013年秋に再開館することが決められていた。その時には柿落とし公演としてフェニーチェ歌劇場、ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団などが来演することも発表され、いやが上にも期待を高めた。この二つのホールの動向は、沈滞ぎみにあった大阪音楽界に期待をもたらし刺激として迎えられている。

関西のオペラ界も、それなりに活発な動きを見せた年ではあった。ありきたりのオペラではなく、意欲的、個性的な演出を試みる傾向がますます強くなっている。低料金のサロン・オペラ、小規模のホール・オペラも現れ、オペラの裾野は広がっている。だが経済的な苦衷から依然免れてはいない。

■ 関西歌劇団

春の公演はビゼーの《カルメン》(6月)だった。岩田達宗の演出はドラマの本質に迫ることを意図し、ビゼーが台本を完成したあと書き加え、かつ直接ドラマと関係のない部分を省略した関西歌劇団版の《カルメン》を試みた。そのため第1幕の衛兵の交代がないなど、通常とは違った舞台が出現したが、総体的にはドラマをストレートに運ぶ丁寧な作風だった。出演者はダブルキャストで、若い新進たちを積極的に登用し、ドン・ホセ：清水徹太郎の好唱を引き出した。この好唱で彼は音楽クリティック・クラブ奨励賞を受賞。指揮：井村誠基、演奏：ザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団、合唱：関西歌劇団合唱部。フランス語上演、日本語字幕付。尼崎あましんアルカイックホール。

秋の公演はモンテヴェルディの《ポッペアの戴冠》(10月)だった。幸運や美徳より愛が優るというテーマは、バロック・オペラだけでなく、現代の舞台に通用する風刺的、享樂的な魅力を持っている。井原広樹の演出は、客席が演技・演奏者を取り囲み、通路も舞台のうちといった劇空間を構築。数多い出演者は現代に近い衣裳をつけ、舞台と客席の一体感に努めていた。本来長時間にわたる大作を2幕にまとめあげた手腕も評価できる。ポッペア：橘知加子らも好演。音楽はヴァイオリンとリコーダー2本、リュート、チェンバロ、オルガン、チェロ、ヴィオラ。指揮：本山秀毅。イタリア語上演、日本語字幕付。吹田メイシアター中ホール。

■ 関西二期会

春の公演はチレア《アドリアーナ・ルクヴルール》(5月)だった。彼女は18世紀のコメディ・フランセーズに実在した女優。舞台では名花と賛えられたが、私生活での情愛も激しく、恋敵に毒殺された。それだけにメロドラマ的な魅力は十分だが、謙遜、誇り、怨念といった複雑な内面を持った役づくりは容易ではなく、やや物足りない。しかし音楽の流麗さ、アリアの美しさ、脇の人物の熱演など聞き応えのある舞台だった。指揮: ダニエーレ・アジマン、演出: 井原広樹。演奏: 大阪交響楽団、合唱: 関西二期会合唱団。イタリア語上演、日本語字幕付。吹田メイシアター大ホール。

秋の公演は《コジ・ファン・トゥッテ〜恋人たちの学校〜》(11月)。このオペラは演出の松本重孝が何度も取り上げて来たが、今回は「作品そのものに語らせる」という意図を堅持し、もっぱら音楽に基づいた運びになった。その典型ともいえるべきなのが、指揮の園田隆一郎がフォルテピアノで通奏低音を弾き、言葉も掛け合うという軽妙洒脱な参加ぶり。さらにドン・アルフォンゾ、デスビーナにヴェテランを配して、物語の喜劇性を高めたことで、爽やかな仕上がりになった。余計な演出は不要という証でもあり、皮肉にもなったようだ。指揮: 園田隆一郎、演出: 松本重孝。演奏: ザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団、合唱: 関西二期会合唱団。イタリア語上演、日本語字幕付。尼崎あましんアルカイックホール。

■ 滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール

びわ湖ホールは1月、平成23年度地域創造大賞(総務大臣賞)を受賞した。西日本では初めての本格的オペラ劇場として音楽文化

の振興と普及に尽力した功績が評価された。その内容は「プロデュース・オペラ」「オペラへの招待」「沼尻竜典オペラセレクション」の3本柱が中心となり、「オペラ入門シリーズ」「オペラ入門講座」など初心者を対象にオペラの裾野を広げる配慮や、プロを目指す若手人材を対象とする「オペラ・アカデミーin びわ湖」など、手厚い活動を続けている。

この年のメインはプロデュース・オペラの《タンホイザー》(3月)だった。このプロデュース・オペラは年々規模が大きくなり、今回は神奈川県民ホール、東京二期会、京都市交響楽団、神奈川フィルハーモニー管弦楽団との5者体制。しかもこの大作を日本人キャストのみで上演するのだから意気軒昂だ。演出はドイツの巨匠ミヒャエル・ハンペ。読み替えが流行する昨今だが、正当を貫く彼の姿勢は変わらず、またタンホイザー: 福井敬らの歌唱・演技も堂々とした品格。合唱の二期会合唱団とびわ湖ホール声楽アンサンブルも好演で、感動的な舞台になった。指揮: 沼尻竜典。ドイツ語上演、日本語字幕付。同ホール大ホール。

この正統派オペラと対照的だったのが、沼尻竜典オペラセレクションの《コジ・ファン・トゥッテ》(11~12月)だった。舞台は現代的な読み替え。背景に世界主要都市の時刻を告げる時計が6個並べられ、それは登場する6人の“時差”を示し、逆回転して心情の変化を物語ることになる。人間の心は移ろうもの、という暗示や風刺、更にユーモアも加味して魅惑的だった。指揮: 沼尻竜典、演出: ジョルジュ・デルノン。演奏: 日本センチュリー交響楽団。イタリア語上演、日本語字幕付。同ホール大ホール。

このほか「オペラへの招待」シリーズでは《森は生きている》(6~7月)と《三文オペラ》(10月)があった。《森は生きている》は、児童文学の作家マルシャークの名作を下敷き

に、作曲家・林光が日本語テキストに改めて作曲した。今回はその室内オーケストラ版を用い、林に教示を受けた寺嶋陸也が指揮した。演出: 中村敬一、ピアノ: 斎木ユリ、管弦楽: いずみシンフォニエッタ大阪、声楽: びわ湖ホール声楽アンサンブル。日本語上演、日本語字幕付。同ホール中ホール。林光はこの年80歳で他界したが、このオペラは今後もびわ湖ホールで継続上演される。

《三文オペラ》は、演出の栗山昌良が1978～79年の東京室内歌劇場での上演後、34年ぶりに取り組む再演。今回は彼のたつての希望で実現しただけに「演劇だけ、音楽だけでは表現しきれない。そこが演出家には魅力」と制作発表の場で意欲を話していた。それだけに一流のスタッフ陣とともに稽古に半年以上かけ、丹念に作りあげた。原作: ベルトルト・ブレヒト、作曲: クルト・ワイル、指揮: 園田隆一郎。演奏: ザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団、合唱: びわ湖ホール声楽アンサンブルほか。出演: メッキー・メッサー: 迎肇聡ら。日本語上演、日本語字幕付。同ホール中ホール。

■ 大阪音楽大学ザ・カレッジ・オペラハウス

2012年の公演はヴォルフ＝フェッラーリの《イル・カンピエッロ》(10月)だった。ヴェネツィアの下町の小さな広場を取り囲む民衆のあけすけな生活を、親しみ深い音楽で温かく包んでおり、20世紀オペラの意外な側面を見る思いだ。3幕仕立てのオペラは、ドラマが面白いだけに混沌としかねないが、栗國淳の演出は様式化した演技で主題を維持し、歌唱とドラマの融和を際立たせ、洒落た風俗劇に仕立てあげた。指揮: 大勝秀也、演奏: ザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団、合唱: 同合唱団。イタリア語上演、日本語字幕付。大阪音楽大学「創立100周年記念プロ

ジェクト」。関西初演。

■ 兵庫県立芸術文化センター

この年のメインは、佐渡裕芸術監督によるプロデュース オペラ《トスカ》(7月)。例によって上演期間は8日、開演は午後2時という形態を踏襲し、女性ファンを吸収した。キャストはダブルで、主役級には外国人歌手も起用。日本人歌手はトスカ: 並河寿美、カヴァラドッシ: 福井敬、スカルピア: 斉木健詞。それぞれの持味を披露し、華麗なスペクタクルになった。指揮: 佐渡裕、演出: ダニエレ・アバド、演奏: 兵庫芸術文化センター管弦楽団、ひょうごプロデュース オペラ合唱団、同児童合唱団、オープニング記念第9合唱団。同センター KOBELCO 大ホール。イタリア語上演、日本語字幕付。

■ ニュー・オペラシアター神戸

2012年のメインの公演は《ラ・ボエーム》(2月)だった。ひと頃関西でも幅を利かした読み替えもすっかり影をひそめ、この《ラ・ボエーム》第1幕でロドルフォがストーブで燃やした原稿が、屋根の煙突から出る煙になって出るという演出を見せられると、懐かしさと感傷を覚えてしまう。ミミ: 吉田早夜華ら歌手もそんな風景の中で収まり、好唱だった。指揮: 牧村邦彦、演出: 直井研二、演奏: ザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団、第2幕ではニュー・オペラシアター神戸合唱団、藤ヶ丘幼稚園親子コーラス、宝塚少年少女合唱団など子供たちにも活動の場を与えていた。尼崎あましんアルカイックホール。イタリア語上演、日本語字幕付。

■ 河内長野マイタウンオペラ

河内長野マイタウンオペラが、本拠とするラブリーホールの開館20周年記念事業として「コンチェルタンテ」という新規の事業を始めた。管弦楽団、地元のブラスバンド、バレエ団、歌手・合唱団を糾合して、地域に密着したオペラを作りあげるといったもの。その形態の第1作がブッチーニ《トゥーランドット》(7月)。タイトルロールには地元のソプラノ平野雅世を起用し、合唱は男声・女声・児童を配置して声量の統制を図り、管弦楽の大阪交響楽団は中央に弦、上手に金管、下手に木管、両袖に打楽器、ハープという陣容でオペラに取り組んだ。この企画は、歌唱とオーケストラ伴奏という従来のオペラの形態から脱し、大きな音楽としてオペラを包み込むという方向性を持ったことが特色といえる。指揮: 牧村邦彦、演出: 簀川直子。

■ みつなかオペラ

みつなかオペラは、兵庫県川西市が音楽・芸能の拠点としているみつなかホールで継続されているオペラ企画。その第21回に当たる2012年、ドニゼッティ・シリーズの一つ《ランメルモールのルチア》(9月)を上演した。ドニゼッティのオペラは小ぶりのこのホールによく似合い、演出の井原広樹は装置のマストロマッティが駆使する大きな鏡を舞台正面に設けるなど、イタリアの歌劇場なみの作風を取り入れて観客サービスに努めてきた。彼とコンビを組んでいる牧村邦彦の指揮も話題にのぼることが多く、今回は「狂乱の場」でのルチア役の新進・古瀬まきをと管弦楽のフルートとのデュオが観客に大受けした。演奏はザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団、合唱: みつなかオペラ合唱団。イタリア語上演、日本語字幕付。

■ 堺シティオペラ

第27回定期公演に、日頃上演されることが稀な日本物《ちゃんちき》(9月)を取り上げた。人間世界の物語でなく、民話の「狐と^{かわうそ}鰻」「尻尾の釣り」を下敷にして動物の世界をユーモラスに描き、その実、生存の厳しさをじんわりと暗示する。作曲: 團伊玖磨、台本: 水木洋子。演出の茂山千三郎は能狂言の所作を用い、世故に長けた親狐と甘ったれの子狐を軸に、騙されて意趣晴らしする鰻夫婦との知恵比べを剽軽に描き尽くした。その掛け合いに三味線、ちゃんちきのお囃子、日本舞踊が加わる。更に合唱が黒子姿で横長に居並び、その上に大きな満月がかかる、など歌舞伎的な視覚効果も巧妙だった。

出演者も好演だった。ダブルキャストの2日目の親狐: 井原秀人と子狐: 柳内葵衣の愛らしいやりとり、鰻夫婦: クリスマニス・ノルヴェリスと片桐仁美のとぼけた味が秀逸だった。特にラトヴィア出身のノルヴェリスが日本語を見事に理解し、三河弁を混じえた歌唱をこなし、今後邦人作品を世界に向けて発表できる夢を与えたことは大きい。指揮: 船曳圭一郎、合唱: 堺シティオペラ記念合唱団、演奏: ザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団。堺市民会館大ホール。日本語上演、日本語字幕付。

■ 京都芸術劇場春秋座

奈良在住の作曲家・尾上和彦の創作オペラ《月の影—源氏物語—》(5月)が上演された。原作は膨大な物語だが「人々の愛、憎しみ、悲しみ、嫉妬など人間の心のひだ、人間がもつ哀れを描きたい」という作曲家の主張を基に、物語を一つ一つ辿るのではなく、物語の中の重要な和歌をアリアに替え、それらを歌い繋いで女房・更衣たちの心奥に迫るという

構成である。アリアは現代語訳。舞台上手に紫式部が座る椅子が置かれ、下手に夕顔、末摘花、六条御息所など光源氏をめぐる女性が華麗な装いで次々に登場し、歌い、舞い、演じる。ラストでは紫式部と女性たちが合唱し、スクリーンに大きな満月が現れて幕を閉じる。指揮はダブルで、尾上和彦、奥村哲也。演出：茂山あきら。出演はダブルで、光源氏：西垣俊朗、北村敏則ら。演奏：Moon Shadow アンサンブル、合唱：月の影合唱団。日本語上演、日本語字幕付。

■ VOC (Vivava Opera Company)

ヘンデルのオペラなどを追求して来たVOCが《ラダミスト》(9月)を取り上げた。近年ヨーロッパではヘンデル・オペラが歌劇場や音楽祭で上演されているが、日本ではVOCが地道に取り組み、貴重な足跡を印してきた。今回はその18回目。このオペラには初演版と改訂版があり、登場人物たちの設定を変更した改訂版が専ら用いられているが、ここでは変更前の初演版を取り上げた。日本初演。

物語の舞台は1世紀半ばのアララト山の周辺。トラキアの王子ラダミストと美しい妻ゼノービアに、アルメニアの王ティリダーテが横恋慕したことから始まる。錯綜した展開になり、ティリダーテの暴虐に席卷されるが、後半で、ラダミストが勝利する。ラダミストはティリダーテを許し、またティリダーテの妻ポリッセナの献身的な愛のお陰で事態は平和的に終息する。

このオペラは1720年、ロンドンのヘイマーケットの王立劇場で初演され、客席は興奮と熱気に包まれ大成功だったと伝えられている。破滅的な復讐劇にならず、愛と寛容に包まれた観客が共感を呼んだものと思われる。今回の演奏では声楽が透明感のある音楽

を繰り広げ、ラダミスト役とティリダーテ王の弟フラアルテ役は女声を受け持ち、優しいムードを醸し出した。公演当日は台風に見舞われる悪天候だったが、客席(約500)はほぼ満席で、拍手とブラボーに包まれた。指揮・演出・制作：大森地塩。演奏はバロック・アンサンブルVOC。伊丹アイフォニックホール。英語上演、日本語字幕付。

■ 新国立劇場 高校生のためのオペラ鑑賞教室・関西公演

今年は昨年に続き、ドニゼッティ《愛の妙薬》(10月)。チェーザレ・リエヴィの演出は巨大な本をモチーフにした装置から出演者が顔をのぞかせたり、実物大のセスナが登場したり。カラフルな原色の衣裳を着た出演者がコミカルに動き、観客を楽しませる工夫に溢れていた。アディーナ役には光岡暁恵(藤原歌劇団)、相手役のネモリーノに大槻孝志(東京二期会)ら実力派揃い。

観客は高校生たち。地元のさまざまな学校から集まり、わいわいと賑やかだ。幕間の休憩中に仲間うちでオペラ評が始まる。「薬売り(ドゥルカマーラ：鹿野由之)がうまかった」「衣裳が現代的過ぎる。オペラが作られた年代が感じられる方がいい」。アンケートでは「テレビにはない良さを感じた」「今の自分にあてはまる話だった。私も頑張れそう」……?。ともあれ約180年前に作られた物語が受け入れられたのは、オペラの前途が暗くない証拠と理解していいだろうか。指揮：城谷正博、演奏：大阪フィルハーモニー交響楽団、合唱：新国立劇場合唱団。尼崎あましんアルカイックホール。イタリア語上演、日本語字幕付。

■ サロン・オペラ

2012年の関西のオペラ公演は、一流ホールのいい席で15,000～12,000円が普通。大阪近隣の都市のホールで8,000～4,000円が多い。だが、もう少し手軽に観に行けないかという潜在的な欲求は、オペラ・ファンの間に根強い。それに合わせたかのようにサロン・オペラが今、人気を集めている。その一つが大阪のエルセラーンホール(412席)でのヴェルディ《椿姫》(12月)。入場料は3,000円。場所は大阪・堂島で、地理的、文化的に環境は申し分ない。また演目もヴェルディ生誕200年を翌年に控え知名度も十分、という利点が重なり、客席は大入り。立見も

出る賑わいだった。イタリア語上演、日本語字幕付。

もっとも、劇場空間が小さいだけに舞台装置は衝立、机、椅子といった小規模。演奏のアンサンブル・ムジカ・アニマはピアノ、ヴァイオリン、クラリネット各1という小編成。だが歌手はヴィオレッタ:西側楨里子ら関西二期会の中堅をそろえ、アルフレードには国内外のコンクールで受賞が多い藤田卓也を起用していた。演出:渋谷文孝。このエルセラーンホールでの公演は、オペラだけでなくコンサートもあり、いずれもチャリティとして開催されている。新しい上演形態になるかも知れない。